

ラオスにおける高等教育の現状 - 仏教と教育の関係から見たラオスの高等教育 -

櫻井亜沙子

近年のラオスにおける仏教と政府の関係とは...

ラオスにおける教育の普及は仏教と深く関わっており、14世紀にラーンサーン王国として創始されて以来、学校教育は仏教徒の男子のみに限定され、ワット（寺院）で教育を受けていた。フランス統治時代、フランスはラオス人の知識階層を育成しない方針を採り、独立後もラオス政府はラオス人の教育に力を入れることはなく、ラオスにおける教育は遅れる一方であった。教育政策に変化が起こったのは1986年以降のことで、ようやく具体的な教育計画が行われるようになった。1990年、UNESCOが国連ミレニアム開発計画としてEducation for Allを掲げて以降、ラオス政府は初等教育の発展に最も力を入れている。

86年以降は海外への留学も公的に可能になり、国語としてのラオ語の普及、さらに伝統医療を通じて社会福祉に貢献することが僧侶に課せられた。世俗教育と合体し、スポーツ以外は何でもあるのが僧侶教育の現状である。

ラオス人民民主共和国の政治的実権を握ったパテート・ラオを指導していたのは、マルクス・レーニン主義を標榜する人民革命党であった。1970年代前半まで、政府は仏教と社会主義の考え方を類似したものと位置づけてきたが、社会主義の思想が台頭し、仏教の儀礼的な慣行や、托鉢などで寄付を集めることは無駄であり、悪しき慣行であると仏教をラオスから排除しようという方針を掲げ始めた。人民革命党は資本主義段階を経ずに社会主義国家を建設することを目指し、企業の国営化、農業の集団化など性急な社会主義経済政策を取った。この政策は経済活動を停滞させ、深刻な食糧・物不足を招いた。伝統的に政府は寺院へ資金提供していたが、それを打ち切り、米の配給などに取って代わった。政府は布教活動も禁止し、仏教の社会的地位を弱めていった。この頃から仏教僧の数は激減し、タイへ集団移住する者、俗人の生活へ戻る者が増えていった。

1979年、人民革命党は性急な社会主義政策を見直し始めた。仏教思想の自由化を始め、少しずつラオスに仏教が蘇っていった。もはや政府に仏教の広がりを止めることはできず、ラオスの人々の生活に浸透していった。その頃から僧侶は生産的な仕事をするのに必要とされ、教師や医師として働く僧侶が増加した。寺院内での学習カリキュラムには文学や歴史を始めとして、薬学や本草学などが取り入れられ、政府によって管理されるようになった。

上記のようなラオスの教育政策を考える上で寺院での教育は重要な役割を果たしている。今回ラオスを訪問し、僧侶が人々の生活に深く浸透していることを知った。

ラオスにおいて仏教は政府と深いかわりを持っており、ラオス政府が仏教を文化的求心力として国内の他民族状況を統合しようとする意図が見える。寺院で学ぶ僧侶がどのよ

うな教育を受けているのか、どのような生活をしているのかは全く未知のものであった。そこでラオス人でも普段の生活ではあまり関わりのない僧侶に焦点を当て、調査しようと考えた。僧侶教育はどのようなものか、問題点はないか、ラオスの発展のためにどのような役割を果たしているのかを明らかにすることで今後のラオスにおける教育政策の課題を探っていききたい。

方法

対象 ヴィエンチャン市内の寺院の僧侶

(ワットシェンヌン、ワットチャンタ、ワットオントウ、ワットミーサイの僧侶)

質問紙を作成し、実際にワットへ行き、僧侶にインタビュー形式で回答してもらった。寺院では何を学んでいるのかを知るために、サンガカレッジという僧侶のための学校を見学させてもらった。また、その暮らしを知るために僧侶の暮らす寮や、寺院以外に通う大学に同行し、インタビューをした。

僧侶のバックグラウンド

インタビューを行った全ての僧侶がヴィエンチャン市やヴィエンチャン県の出身ではなく、サワンナケート、パークセー、ルアンプラバーンといった地方出身者であった。ワットシェンヌンの僧侶の一人は「小学校までは自分の村にあったが、それ以上はなかったので中学の勉強をするためにヴィエンチャンの寺院で僧侶の生活をしながら勉強している」と語ってくれた。ワットチャンタの10代の僧侶も「中学まではあったが、高校がないのでヴィエンチャンに来て勉強している」と語っていた。ワットシェンヌンの26歳の僧侶を除いては、すべての僧侶が教育を受けるために寺院に入っている。また、彼らの両親はほとんどが農業を営んでおり、学校に行かせるよりも子どもたちを働き手としたいと考えている。彼らはヴィエンチャンの寺院へ入り、学校へ通うことを自ら選んだ者ばかりだった。そう考えると、彼らの両親世代よりも彼ら自身が教育を将来のために必要なものだと考えていることがわかる。

また、彼らは学校で英語を学んでいるため、レベルの差はあるが全ての僧侶と英語で話をする事ができた。英語でインタビューをしたところ、僧侶には monk と訳される僧侶と novice と訳される僧侶がいた。一般的に novice は20歳以下の僧侶のこと、monk は21歳以上の僧侶のことという分け方をしていると教えてくれた。Monk は仏教僧、novice は修練者、新信者という意味を持つ。

僧侶になるために必要なこと

ラオスでは高等教育を適齢人口に伴い、大学に通うことを希望する若者が急増している。寺院に入れば僧侶の生活と両立しなければならないが、学費、生活費は基本的に無料なので寺院に住みながらヴィエンチャンの高校や大学に進学する。

僧侶になるには特別な試験などはないが、ある種の契約が交わされる。彼らは小学校または中学校卒業後に寺院に入るために直接寺院を訪れ、その門を叩く。彼らの主人となる住職により面接のような試験が行われる。そこで「5年間または、10年間この寺院で仏教を学び、仏事に貢献するか」を問われるという。それを受け入れることで寺院での生活を許されるのである。彼らは10歳～12歳前後から僧侶生活を始めているため、やはり彼らの村には小学校までしかない場合が多い。

髪や眉をすべて剃り落とし、食事は午前中のみ町の人が炊き出してくれた食事をし、女性に触れることを禁止される。彼らのトレードマークであるオレンジ色の僧侶服だが、制服のようなもので寺院に何枚も用意してある。自分のものが欲しければ購入することができる。この服を買うかどうかは個人の自由だが、暗黙の了解として買わなければいけないようだ。このような辛い修行生活をしているが、規律を守って生活していれば咎められることはなく、街の色々な場所で普通の若者のように集まって談笑する姿を見かける。しかし、基本的に俗人とはあまり交流を持たず、僧侶同士か、元僧侶だった者と付き合う。これは規律ではないようだが、やはり同じ境遇にいる者同士気が合うのだろう。酒を飲むことは禁止されているが、タバコは禁止されていないため、喫煙している僧侶も多く見かける。

僧侶の生活

各僧侶にインタビューしてみたが、どの僧侶も同じというわけではなく、またインタビューの質問内容が不十分で答えられない僧侶もいた。以下にインタビューした僧侶の生活を紹介していく。

【ワット シェンヌン】 26歳の僧侶 サワナケート県出身

毎日朝と晩、私たちは仏陀にお祈りをしなければならない。そして、私たちは毎日寺院で仏法やパーリ語、仏教の歴史を勉強している。(彼は学校ではなく寺院での生活を教えてくれた)

17歳の僧侶 ルアンブラバン県出身

朝と晩はお祈りをします。月曜日から金曜日まで、歩いて学校まで行きます。寺院では仏法とパーリ語、英語を勉強します。学校では数学や英語を勉強します。

18歳の僧侶 サイニャブリ県出身

朝は仏陀にお祈りをし、午後から学校へ行きます。学校では英語や数学、図工の授業があります。夜は寺院に帰ってきてまた仏陀にお祈りをします。また、私は私立のcollegeに通っています。そこでは法律を専攻しています。

19歳の僧侶 パクセー県出身

毎日、寺院では仏法と英語を勉強し、学校では英語や数学を勉強します。

【ワットチャンタ】22歳の僧侶 カムアン県出身

朝晩は毎日仏陀にお祈りをします。月曜日から金曜日は College に行って英語や日本語などを勉強しています。土日は学校が休みですが、寺院での仕事をしています。

21歳の僧侶 チャンパサック県出身

朝晩は毎日仏陀にお祈りをしています。火曜日から木曜日の朝9時～10時半まで学校で日本語の勉強をしています。月曜日から金曜日までは午後3時～4時半まで英語の勉強をしています。それ以外の時間は寺院で仏教の歴史や仏法、パーリ語や英語を学んでいます。土日は学校が休みですが、寺院の仕事をしています。今は寺院を改修中なのでその手伝いをしています。

朝晩にお経を詠むことや托鉢を日課とし、寺院では仏教に関することを学んでいるのは全員同じであったが、学校で学んでいることは年齢が様々なので異なっていた。また、学びたい科目によって履修しなければならない期間が異なるので、ある者は college で3年間学び、ある者は4年、5年と学ばなければならないようだ。しかし、市内の寺院に住んでいれば学校が遠くて通うことができなかつたり、弟妹の面倒や家の雑事に追われて勉強が滞るといことがないので留年や退学の心配がないと話していた。

僧侶の宗教関係の勉強は、タイ語で編纂されたナワコワート(初版1899年)を使用している。仏法、パーリ語を混在させてカリキュラムとしている。他に仏教日曜学校のような「青少年のための学校」があるが、学僧が多いため盛んではない。ラオスは仏教を人生や社会生活に役立つものであると喧伝している。

サンガカレッジで教育を受ける僧侶たち

サンガカレッジはヴィエンチャン市内の寺院、ワットオントウの敷地内に隣接してある。そこでは5年間の仏教についての教育を受ける。授業は朝8時半から11時までと、午後1時から4時半までに分けられる。中学卒業程度の学歴の僧侶がサンガカレッジで学ぶことを許される。ラオスではヴィエンチャンとチャンパサックにのみサンガカレッジが存在する。ヴィエンチャンのサンガカレッジでは1学年に120人、5学年までの僧侶が仏教を学んでおり、教室は5教室ある。一つの教室に全員収容できないため、授業は午前と午後に分けられる。サンガカレッジでは仏教に関する授業の他に、英語、コンピューターなど実践的な授業がカリキュラムに含まれている。授業料は無料であるが、教材は自分で買う。

サンガカレッジでは最終学年になると、短期集中で Teacher Training Course が設けられる。

Teacher と言っても一般の教員ではなく、俗人のために仏教を専門に教える教員である。そ

れだけ、一般の学校でも仏教を生活の一部として普及させている。2001年のアメリカの同時多発テロ以来、平和への祈りから政府が学僧に対してこのようなコースが設け、仏教の教えを人々の心に浸透させようとしている。

この短期集中講義を受けると、ヴィエンチャン近郊の25の学校で、小学校3年生～高校生までを対象に仏教を教えることができる。これらの学校のカリキュラムには仏教の授業が取り入れられており、僧侶達が週に2,3回学校に行き、一般の学生に仏教を教える。以前まで教材はなかったが、近年 Dhamma deliver textbook という仏教の教科書が発行された。このような取り組みから、政府が僧侶を使って社会を統一しようとする意図が見える。僧侶自身も仏教に誇りを持ち、積極的に社会に貢献していることがわかる。

寺院教育の問題点

寺院での教育について問題点を挙げている僧侶はいなかった。僧侶自身が教育を受けられることにありがたみを感じていることがわかる。ワットシェンヌンの僧侶は、仏教はラオス人にとって重要であり、仏教の教えはラオス人の倫理観であると話す。しかし、寺院は閉鎖的であるため、一般のラオス人には縁遠く、仏教の重要性が失われていくことに危機感を感じている。ラオスの文化の象徴である寺院がもっとお祭りや何か催しを行い、ラオス人にも外国人にも仏教の良さを理解してもらいたいと話していた。今の寺院にはそのような努力が欠けていることに問題意識を感じているようだった。

別の僧侶は寺院には教材が少なく、また、毎日自習をするときは寺院の木陰などを利用しており、雨季は自習する場所が限られるため、図書館がほしいと話していた。

ワットチャンタの僧侶2名は学校に払う学費の捻出が困難だと話していた。寺院での生活は、ほとんどお金がかからないが、教材を買ったり、他の学校へ通おうと思えば学費がかかるのは当然である。4ヶ月間英語の講義を履修していた僧侶は学費をおよそ60ドル支払ったそうだ。学校が長い休みに入ると僧侶たちは実家に戻り、そこで両親、親戚からわずかな学費や生活費をもらい、賄っている。しかし、学校で履修したい科目が増えるとそのお金だけでは学費が払えず、住職に相談して学費を出してもらおうことがあるようだ。

僧侶は寺院にある寮で共同生活をしているが、学僧の数が増加し寮内での自分のスペースがなくなっているのも問題点の一つに挙げていた。寮が必要ならば僧侶自身で建て増しや改修しなければならず、土日の休みの時間を削ってその作業に追われることがある。寺院での生活と学校での生活を両立するのは私たちが想像するよりも困難なことが多いと言えるだろう。

上述したように、サンガカレッジ以外の学校で専門知識を身につけようと努力する僧がたくさんいる。そのなかで、ラオス唯一の国立大学、ラオス国立大学に通う僧に話を聞き、大学に同行させてもらった。ラオス国立大学では様々なバックグラウンドを持つ学生に話を聞くことができた。

ラオス国立大学での教育状況

今回見学させてもらったのは

ラオス国立大学教育学部 1 年生 47 人，うち女生徒 10 人，僧侶 6 人

ラオス国立大学では一学年およそ 500 人の定員で，午前中に約 250 人，午後 50 人，夜間 150 人がそれぞれ 3 時間 15 分の講義を受ける。教育学部は 5 年制で，学部によって学習年数は異なる。学生は制服としてラオスを象徴するタートルアン寺院のマークがついた白いシャツを着用し，男子は黒いズボン，女性はラオスの伝統的な女性の衣装のシン（黒）を履いて講義を受ける。教室にいる数名の学生に年齢を聞いたところ，20，21，23，34 歳と様々で，ばらつきがあった。10 代で入学できる学生はごくまれである。以前は僧侶であったという青年が 3 人おり，「寺院から大学まで遠くて通えない」などの理由で僧侶を辞めている。

今回見学させてもらった講義は英語の発音と会話であった。講義内容は初歩的な英語を学ぶものであり，教材はほとんどがベトナムなど，他の国から入ってきたものを使用していた。

ラオス国立大学の教員養成コース

ラオス国立大学の教育学部では唯一，高校の英語の教師の資格を取得することができる。今回見学させてもらった講義では最終学年による模擬授業が行われていた。日本の教職課程のように，ラオスでも教師になるには専門の知識が必要になる。教育学部の学生は全員教師になるための様々な講義を受け，卒業時には全員が教師になることができる。

ある一定の課程を修了すると，5 年生を対象に教育省の指導担当が大学に来て，学生たちの模擬授業の内容を指導する。学生たちは 1 週間の間平日は毎日模擬授業を行わなければならない。週交代で模擬授業を行う。実際に講義をしている教員は学生が模擬授業を行っている間は教室でその授業を聞いている。学生によって教授法は様々だが，教授内容が初歩的すぎるように感じた。教室内の雰囲気自体が中学校のような印象を受けた。

このコースは約 2 ヶ月間続けられ，これを終わると教員としてラオスの小中高校で教えることができる。「教員免許は持っていますか？」という質問に対して学生は「持っている」と答えていたが，大学の卒業証書が免許となるようだ。

ラオスの教員養成と教育カリキュラム

ラオスで教員養成制度が整備されたのは 1990 年代である。80 年代までは教員養成は 59 の小さな教員養成学校において行われていたが，共通カリキュラムもなく，卒業後 3 年間の訓練を受けることにより教員の資格を得ることができた。しかし，90 年代半ばアジア開発銀行の援助により小規模学校を教員養成学校に統合した。98 年，教員養成学校は体育学校と芸術教育学校の専門科目含む 10 の教員養成学校とラオス国立大学教育学部に整備され，教育省の管轄に置かれることとなった。

ラオスの教員養成は新規養成（pre-service）と現職研修（in-service）に2分する。新規養成のための教員養成学校は中学または高校卒業後に入学することができる。幼稚園教員の資格取得のためには中卒3年間の養成プログラムに参加することが必要となる。

小学校教員の資格取得のためには、中卒後3年間の養成プログラムに参加するか、高卒後、1年間の養成プログラムに参加する。中学校教員の資格取得のためには、高卒後3年間の養成プログラムに参加する。ラオス国立大学教育学部を卒業した者だけが高等学校教員になれる。

ラオスの教員養成制度の問題点

日本のように教員免許や教員採用試験はない。中学以上でも専門が分かれていない。ラオスでは中学校でも1人の教員がすべての教科を教えているのが現状である。教員養成のための職業学校は主に都市部にあり、地方の学生は通うことだけでも大変な労力と時間を伴う。また若い教員ほど田舎では働きたがらないので、地方での教員不足に拍車がかかっている。きちんとした教員養成カリキュラムを受けていない者が地方の学校の教員として教授するため、地方と都市部の教育格差は広がるという悪循環を生み出している。ラオス政府は教育政策に尽力しているのならば、このような地域間での格差是正のための政策を考えてほしい。実際にラオスに来て教育の現場を見ると、ラオス政府がスローガンとして掲げているような教育改革は実行されているのか疑問を抱く。技術支援などで海外の教育政策を採り入れなければ、抜本的な改革は不可能ではないかと感じた。

ラオスにおける若者の就職事情

僧侶らにインタビューしたところ、将来いい仕事に就くために教育は欠かせないと話す。ラオスにおいても大学を卒業しなければいい仕事は見つからず、「将来 になりたい」という明確な目標を持って勉強している者が多い。就きたい職業はエンジニア、警察官、教師や弁護士、ツアーガイドなど様々である。ヴィエンチャンの街中には技術系や語学専門のcollege(私立の大学、職業学校)が多く、多くの僧侶が高校卒業後寺院からそこへ通う。

ラオス国立大学の学生に質問したところ、大学を卒業しても30%の学生しか就職できないという。教育学部の学生は教員養成コースを修了しても教員になる者は多くない。地方へ行って教員になる者はさらに少なくなる。その理由として公務員としての教員の収入が少ないところが大きいようだ。1ヶ月の収入は平均約50ドルである。ラオス国立大学に入る学生は、自分が国を代表して大学に行っているというエリート志向が強い。そのため収入の悪い仕事はしたくないようだ。一方、大学の学生たちに特に人気があるのは外国語を使ったツアーガイドの仕事である。3人に一人はこの仕事に憧れている。英会話の先生や、外資系の企業で働きたいという学生もいた。海外資本の企業や、外国人相手の仕事は収入もよく、ラオスでは社会的ステータスとなっている。国家予算を増やさ

なければますますラオスの若者は公務員になりたがらないだろう。ラオスには市場に介入できるような産業がほとんどない。ラオス国立大学の学生も、外資家の企業などに頼りきりになるのではなく、国の発展につながるような産業を見出さなければ、ラオス経済に活路は見出せないだろう。エリート意識は持っている一歩で、国を背負っているという意識を持った学生はまだまだ少ないように感じた。

一般の大学生とは異なり、僧侶は社会貢献を念頭に進路を決めているため、教師になりたいという者が多かった。

まとめ

10代後半～20代前半の僧侶から話を聞いてわかったことは、日本のような恵まれた教育制度の下で暮らす私たちとは異なり、彼ら自身が教育を受けられることを当然だとは思っていない意識の差を感じた。特に彼らは地方出身者であり、教育の機会はヴィエンチャン市内の若者よりも限られている。多くのことを学び、将来に生かしたいと考えている勉強熱心な僧侶ばかりだった。学費が高いとは言え、寺院と両親が少しは援助してくれているようなので比較的恵まれているのだろう。

彼らは総じて寺院には問題がないと話しており、教育が十分に受けられない地方の若者にとって、良い環境だと感じた。しかし、僧侶や大学生にインタビューをすることでラオスの教育の問題点が浮かび上がってくる。

親が教育の必要性を感じていないこと

地方では子供は働き手とみなされる。親も教育を受けてきていないため、教育の必要性を感じない。しかし、日常生活の些細なこと、たとえば歯をきれいに磨くことや、人に対しての接し方は学校教育で養われる技術である。政府が地方にも教員を増やし、親に子供が学校に行く重要性を、教員を通して教えていく努力をしてほしい。

若者の教員離れ

日本では一般的に医師や教師は立派な職業として社会的に認められている。しかし、ラオスでは収入が低く、地方に行かなければならない、休みも少ない辛い仕事とも考えられている。もちろんラオスを支える仕事としての誇りはあるが、本当にラオスの発展を考えている者でなければ目指そうとしない職業である。日本でも言えることだが、そのように思える若者は多くない。収入がよく、楽しく暮らしたい、違う職業に就きたいと心変わりし、ラオス国立大学教育学部を卒業しても教員にならない学生が多い。教員という職業の社会的な地位と、安定した収入を確保することが、ラオスの教育事情改善のための大きな課題となっている。

感想

ラオスに来て印象的だったのが日本では見慣れない仏教の僧侶たちだった。なぜこんなに多くの若者が僧侶になっているのだろうと不思議に思ったことが本レポートを書くき

かけになった。寺院に行って彼らにインタビューすると嬉しそうに、見知らぬ外国人の私に一生懸命自分たちの生活や寺院の教育、ラオスの教育について教えてくれた。純粹に国のためになる仕事に就きたいと情熱を持って学校に通う彼らには、日本人が忘れていたものを思い出させてくれた。ラオスは人口が少なく、とにかく国力がない。戦争でも起きればタイに統一されてしまうのではないかと危機感を覚える。しかし、多くの観光客を魅了しているこの国の若者の力でラオスを発展させていってほしい。どんなに海外の援助機関が支援しても自国の人々が気づかないと何も変わらない。これから急速に変化するラオス情勢を左右するのは、今の教育政策によって生み出される若者たちにちがいない。